



貴重書室前

ミッチェルの『風と共に去りぬ』(1936年)などのアメリカ文学初版本をはじめ、キャプテン・クックとして知られているジェームズ・クックの『南極海航行記』(1777年)などの探検記が並べられました。また、わが国の杉田玄白らの訳による有名な『解体新書』(安永3年-1774年-)とその原本である『ターヘル・アナトミア』(1764年)なども出展しました。

中でも人気があったものは『解体新書』と『ターヘル・アナトミア』で、見学グループの中から「えー」、「わー」、「すごい」などという感嘆の声が何度もあがっていました。

■ ガイダンス

「卒論作成のための資料検索」を開催

本学図書館は9月24日(火)から27日(金)にかけてガイダンス「卒論作成のための資料検索 最終確認編」を開催しました。このガイダンスは、卒論を書くとする4年次生にとって最後の機会になるため、参加した皆さんは真剣な表情で図書館員の説明に聞き入っていました。

■ 国立国会図書館関西館への協力

本学図書館は10月に新しく開館した国立国会図書館関西館からのデータベースへのリンク依頼に応じ、本学図書館のホームページで公開している「スペシャル・コレクション」や「デジタル図書館報」など合計10タイトルの接続を許可いたしました。

私たち図書館員は、相互協力をはじめ多くのサービスが期待できる国立国会図書館関西館のご発展をお祈りしています。

司書雑感

個性的な図書館利用の確立を

もう、10年も前になるでしょうか。私たち図書館員にとって、刺激的な本が出版されました。『図書館をしゃぶりつくせ!』(宝島社、1993)。見たとたんの一瞬たじろぎました。図書館の機能を熟知し巧く使うことによって、多くのメリットが得られることを書いたものですが、「こんな気構えで図書館を使われたら、私たちは一体どうなるの?」。利用者が増えるのは嬉しいことですが、タイトルに強烈な印象が残っています。

確かに、学生の皆さんが大学で過ごす中で、サービス機関の最たるものである図書館を上手に使いこなせば、学術情報から生活情報までがほとんど無料で得られるわけで、この施設が「情報の宝庫」と言われている所以でもあります。

また、最近では図書や雑誌だけでなく、コンピュータを使った情報が極めて簡単に入手できるのです。本学図書館では、電子ジャーナルを含めた国内外の商用データベースとも接続して、様々な情報を学生の皆さんに提供しています。

学生時代に、どのように図書館を使うか。それは人によって様々ですが、「宿題や予習などをする場所」、また「わからない言葉や知識を調べる場所」、さらには「本を借りて読む場所」、そして特に重要なのが、「どのようにすれば、情報が得られるのかを調べ、それを入手する場所」でもあることをオリエンテーションやガイダンスで説明しています。

少し前のことですが、図書館の機能を誉めてくれた学生さんに、使う利点を館報で紹介してもらえないだろうかと尋ねたところ、「自分だけの図書館の使い方にしておきたいのです」。こんな断りがあったことを覚えています。きっと、目的意識もはっきりしていて、この図書館を工夫して上手に使っていたのでしょう。

季節は学芸の秋です。図書館が準備している蔵書や機能に理解を深めて、情報収集に工夫を凝らしてみたいはいかがですか。「しゃぶりつくせ!」と言われると些が驚きますが、自分なりの個性的で丹念な図書館利用法の確立も学生として大切なのでは。

奥 正敬(司書)